



## 「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第3回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

### 「中日のスポーツ文化交流から得たもの」

#### 広西省 庄巖

歴史を遡れば、中日両国がスポーツ界で競争し協力してきたことは、双方に利益をもたらし、アジアのスポーツの発展を促進してきた。例えば、1960年代のバレーボール監督・大松博文さんは中国に“三従一大”（厳しく、難しく、実践から）という訓練理念を持ち込んだ。後に中国女子バレーが“五連覇”という輝かしい成績を収めたのはこうした理念による。21世紀に入ると、日本の卓球選手・福原愛さんが中国に滞在してスーパーリーグに参戦している。彼女自身の実力も絶えず伸びてきたが、日本の女子卓球チームが世界ランキングに返り咲くという重要な効果もあった。2008年の北京五輪では、日本のシンクロナイズド・スイミングの“母”と呼ばれる井村雅代さんが、中国チームを率いて初の団体戦銅メダルを獲得し、歴史的な快挙を成し遂げた。中国側の得意種目について様々な形で中国からの援助が入り、この種目に関する日本側のレベルが向上した例は、枚挙にいとまがない。

私は、スポーツ人文社会学を専攻する一大学院生である。ここ数年、一連の国際交流活動を経験してきた中で、中日におけるスポーツ文化の共存共栄には深く感じるどころがあり、そこから得られたものも非常に多い。

2007年8月24～28日、中日韓の三ヶ国が持ち回りで開催する中日韓青少年スポーツ大会の第15回大会は、桂林市で実施された。この大会は、中日韓の青少年がスポーツを通じて交流する格好の舞台となっており、三ヶ国の青少年のスポーツにおける潜在能力を検証する場ともなっている。卓球の世界チャンピオンである中国の王楠、王励勤などは、共にこの大会で才能を見いだされたのである。私は『桂林晩報』の特派員として、幸運にもこの大会の取材と報道に関わることができた。今でも印象深く心に残っているのは、日本のバスケットボールチームが男女ともに礼儀正しかったことである。メンバー交代の度、選手は観客に向かって深く頭を下げていたのだ。日本の男女バレーボールチームは、試合が終わる度、素早く一列に並んでコーチの講評に耳を傾けていた。講評が終わると、きちんとコーチに敬礼をしていた。気になったのは、その後の試合である。中国チームのメンバーも、交代時に観客へ頭を下げていたのだ。もしや、これは日本チームから学んだのだろうか？勿論、試合のメインは互いに技術を磨き合う過程の方である。当時、日本のメンバーは、中国選手の優れた身体能力と高度なテクニックに強い憧れを持っていた。ある日本の男子バスケットボール選手にいたっては、将来、出来れば、中国でCBAリーグに参加したいと語っていた。

2007年9月、私は成都体育学院に進学し、スポーツ人文社会学専攻の修士課程を学ぶことにした。進学して間もなく、成都体育学院が日本の筑波大学と学術交流を続けてきたということを知った。多くの先生がはるばる日本に渡って客員教授を務め、帰国すると日本のスポーツ文化に関する沢山の論文を発表している。彼らも中日のスポーツ文化交流を広める上で貢献しているのだ。こうした先生方からは、上品で謙虚な人柄と厳格な研究態度を感じることができる。その年の11月、東北アジアスポーツ史学会日本支部の山本徳郎前会長が、成都体育学院を訪問された。彼が「嘉納治五郎（アジア初のIOC委員）とクーベルタンの五輪思想の比較」をテーマとして講演を行った時、学術領域に入ったばかりの私は、この貴重なスポーツ文化交流から多くのものを得ることができた。

2008年8月1日、第29回オリンピック科学会議が、中国の広州で開催された。私が提出した論文『中国各紙のオリンピック報道回顧（1984－2004）』は、幸いなことに会議の「スポーツメディア」(sport media) 壁面掲示に採用された。論文が「壁面掲示」に採用された学者には、掲示場所で15分の発表時間を与えられた。時間内に陳

述し、委員達の質疑に応答しなければならないのだ。その全てが英語である。私がオーストラリアの委員の質問に答えた後、日本の女性学者が急に私の腕をつかんだのである。彼女の論文を掲示した場所に引き込まれてしまったのだ。彼女と話してみると、彼女の論文がテーマといい研究方法といい私のものと非常に似ていることが分かった。違いは、彼女の分析対象が日本の各紙であって、中国の数紙との比較検証を行っていることだった。私達は旧知の友に出会ったかのように、英語で長らく話をした。その後の研究課題について、彼女に教を請うてみたりもした。彼女の名は田原淳子さんと言ひ、日本の国士館大学体育学部の准教授である。より好都合だったことに、彼女が筑波大学の博士課程にいた時の指導教員は、私の修士課程の指導教員が筑波大学で客員教授をしていた時の指導教員だったのである。この会議に参加して、田原さんという学術的な根源を同じくする日本の学者に出会えたことは、望外の喜びだった。より重要なことは、その忘れ難い経験により、学問の道がより充実したことである。視野が広がり、国際的に最先端の研究テーマを知り、いくつかの厳格な研究方法を学ぶことができた。

2009年8月1日、第8回の東北アジアスポーツ史学術大会が中国の大連で開催された。この会議は、毎年一度、中日韓と台湾が持ち回りで主催しているものである。数日間の学術交流の中で、私は改めて日本の学者の勤勉さを味わった。総じて彼らのテーマの切り口は小さいのだが、徹底的に研究し尽くしている。こうした理解から、間もなく始まる私の修士論文のテーマに明確な方向性が定まった。針小棒大、つまり、小さな切り口から徹底的に深く突き止めるのである。